OISO MUNICIPAL MUSEUM

Report リポート

大磯町郷土資料館だより
1992・10・31
6

もくじ

◇古代の餘綾(6) 2
◇発掘された近代遺物 3
◇「相模湾の動物」展について 4
◇最近の受入資料 6
◇西小磯の『小磯ばやし』について
トピックス／行事案内／資料の受入 8

〈館蔵品にみる〉

古代の餘綾(6)

東海大学文学部助手　田　尾　誠　敏

古代において、文献資料以外の考古資料に文字が記されたものには、木簡・漆紙文書・墨書土器・刻書土器などがある。酸性の土壌で有機質の資料の遺存しにくい日本では、これらの資料は文献史学との接点となる貴重な存在である。こういった資料には、文献史学を補うといったことだけでなく、文献史学の空白部分を明らかにしたり、しばしば文献史学の誤りを正すといったことも起こり得る。

最近、おとなりの平塚市で話題となった発見もそういった文字資料のひとつ、墨書土器であった。広報や新聞記事によると[註]、平塚市四之宮山王A遺跡の竪穴式住居から「国厨」と記された墨書土器が6点も出土したと報じられている。相模国府は従来より、高座郡（海老名市）→大住郡（平塚市）→餘綾郡（大磯町）と三遷したことが定説となっている。たびかさなる四之宮地区の発掘調査では、これまで一般の集落遺跡では見られないような遺物は多数出土していたが、直接国府に関わるような遺構・遺物は発見されていなかった。墨書土器では、「政所」「曹司」といった官衙関連の墨書は発見されていたが、国府そのものに関係するものであるとは明言できなかった。今回発見された6点の墨書土器は、ある時期、平塚市の四之宮に国府が置かれたことを示す、第一級の資料であろう。

餘綾の国府については、「伊呂波字類抄」などの文献資料からも、現在の国府本郷・国府新宿のあたりに所在していたのであろうと考えられている。遺跡名でいうと、馬場台遺跡と祇園塚遺跡の一帯にあたる。この餘綾国府でも、緑釉陶器や輸入磁器などの破片、石帯や銅印といった一般集落では見られない遺物がいくつか出土しているが、国府そのものの決め手となるような遺物・遺構は発見されていない。

祇園塚遺跡D地点出土の墨書土器

これまで大磯町教育委員会では、馬場台・祇園塚両遺跡において30次を越える調査を実施しているが、墨書土器の出土は平塚市の四之宮遺跡群に比べて極端に少なく、数点を数えるのみである。これらの墨書土器のなかにも、官衙を示すような意味合いを持つものは見ることができない。

ここでは、祇園塚遺跡D地点の発掘調査で出土した墨書土器について紹介してみたい。

図1に示した資料が祇園塚遺跡D地点で出土した書土器で、第2号住居址と第2号土坑出土の破片が接合

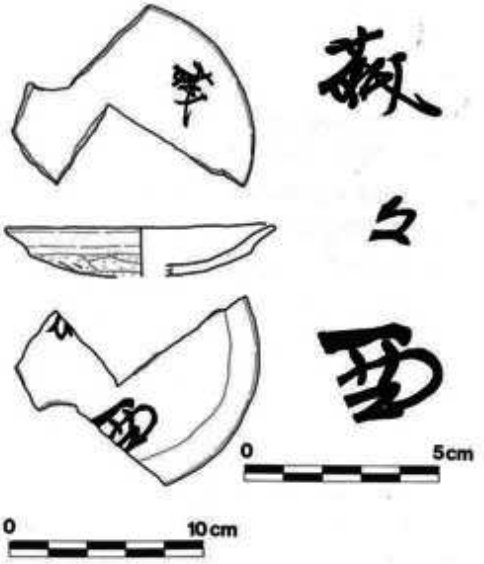


図1　祇園塚遺跡D地点出土墨書土器

したものである。器形は皿で、法量は口径13.9cm・残存高2.1cmを測る。墨書は残存部で3文字が確認できる。外面に「□」(不明)・「酉」の2文字、内面には「茂」と思われる1文字が記されている。「茂」は漢和辞典によると、①からあおい・蜀葵②豌豆③彩りの濃いさまとある。また「酉」の字は、方位か吉祥句を表すと思われ、また内面に灯明皿に使われていたことを示すタール状の煤が付着していることなどから、儀式あるいは呪詛に用いられたものであろうか。

土器に施される墨書は、ふつう1字ないしは2字のものが圧倒的に多く、3字以上の文章になっているものは極めて少ない。墨書は、地名・人名・場所・役職・吉祥句・記号などを意味する場合が多く、解釈不明のものも多くある。こういった墨書土器を通して、官衙だけでなく集落のあり方を検討する研究も登場し、墨書土器の重要性はますます高まるばかりである。

参考文献

大磯町教育委員会　1991　『大磯町における発掘調査の記録Ⅰ』

小島義弘　1986「古代相模国出土の墨書土器」『國學院大學　考古学資料館紀要』第2輯

註)「広報ひらつか」No.493 平成4年8月15日付・「朝日新聞」1992年8月2日付　の記事による。

発掘された近代遺物

大磯町は明治期に海水浴場の開設（1885）及び鉄道の開通（1887）により、多くの政財界人が別荘を設けた。

こうした別荘は、海岸部（国道1号線沿い）や丘陵部（JR東海道線両側）をはじめ町内の随所に見られ、様式も洋館・和館双方が存在するが、関東大震災や財閥解体など社会情勢の変化の中で倒壊したり、取り壊されたりして現在まで残っているものは極めて少ない。

このような別荘建築には、煉瓦（れんが）や瓦、タイル、土管など我が国の産業の発展過程を示す遺物が多く使われており、産業考古学の研究には欠くことのできない資料の宝庫となっている。

ここに紹介する資料は1992年4～7月にかけて、大磯町大磯1,007番地のフジソク孝徳荘（木村別荘、島津佐土原藩主屋敷跡）の発掘調査で出土した赤煉瓦である。

写真は赤煉瓦で構築された排水施設と考えられるもので、現場では煉瓦遺構として取り扱った。基本的には4個の組み合わせで中心を空洞にするもので、単純にそれらが連結して成り立っている。しかし、部分的に煉瓦の変わりにモルタルが用いられており、そうした部分は3個の構成となっている。

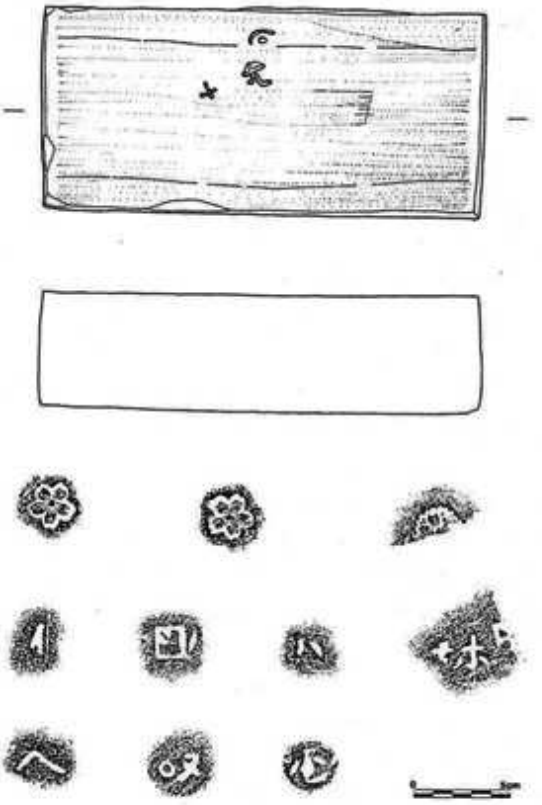
この煉瓦遺構は山裾に造られた溝状遺構と連結しており、発掘当初は完全に埋もれていたもので、先端部は攪乱を受けていて残念ながら全体像は不明である。

赤煉瓦の法量は長手（長さ）22.9cm、平（幅）10.4cm、小口（厚さ）6.0cmで、重量は約2.56kgを計る。また、平面には全資料ではないが刻印が施されている。判別できるものはカタカナのイ・ロ・ハ・ホ・ヘ・ヌなどである。

一方、煉瓦遺構の付近の山裾部分からは桜マークの赤煉瓦が出土している。これらは別名「囚人煉瓦」とも呼ばれ、東京小管集治監で製造されたもので、年代は明治中～後期と考えられる。同時に出土した耐火煉瓦（別名「白煉瓦」）は［NIHONTAIKAKOGYO］の文字が見られるもので、大正期のものと考えられる。

詳細は別に報告するが、これらは島津屋敷に伴うものではないかと考えられる。

（当館　鈴木一男）



赤煉瓦と刻印

煉瓦遺構（上部より）

煉瓦遺構（内部構造）

秋季特別展

「相模湾の動物」展について

相模湾は海産の生物が豊富な海だと言われている。これは縦横に深い海底谷（キャニオン）が存在し、深海性の生物が生息していることや、黒潮が湾の沖合を流れているためである。黒潮は回遊性の魚などを湾に立ち寄らせるだけでなく、それがもたらす温暖な気候によって南方系の種類の生息を可能にしている。また、一方で北方系の種類も数多く生息するが、ほとんどの種類が黒潮の影響で南限となっている。つまり相模湾は北と南の種類の境界線上にあるため、よけいに種類数が多いと言えるのだ。E.S.モース博士をはじめ、多くの研究者が相模湾を訪れているのも、この豊かな生物相に注目したからである。

今回の特別展は、こうした相模湾の生物相のうち動物相に焦点をあて、「環境による動物相の違い」、「大磯海岸と照ケ崎の自然」、「大磯周辺の海で見られる魚や貝などのミニ水族館」の3つを展示の柱として構成した。珍しい動物をクローズアップするのではなく、ごく普通に見ることのできるものに重点をおいた。これは実際に観察できる動物に絞りこんだほうが展示室とフィールドを結びつけやすいと考えたからである。次に各コーナーの解説をしたい。

「環境による動物相の違い」については、私たちが身近に行くことのできる磯、干潟、砂浜をメインに、そこに生息する動物については、はく製・乾燥標本・液漬標本・写真パネルで紹介した。とくに鳥類・貝類・昆虫類・カニ類については種類数を増やし、それぞれの自然環境による種構成の違いを視覚的に理解できるようにした。また、図録に掲載した絵解き検索の種類を網羅し、展示室内で参照できるようにもした。

「大磯海岸と照ケ崎の自然」については、打ち上げ物や大磯漁港で水揚げされた魚の液漬標本などを中心に展示をした。アオバトは海産動物とは言えないが、照ケ崎が全国的にみても有数の飛来地であることを考慮して、あえて紹介することにした。この他、海岸で拾えそうな貝を露出展示し、自由に触れるコーナーも設けた。貝が無くなることも予想し、支障のない種類を展示するとともに、大量に拾っておきストックしている。このような実物に触れる展示は、資料を損なう恐れがあるため、なかなか出来ないと思うが可能な限りこのような展示を心がけたい。

「大磯周辺の海で見られる魚や貝などのミニ水族館」については、野生水族繁殖センターの廣崎芳次博士にご指導いただき、ズームレンズ・ファイバースコープなどを使用して、ワレカラ類やコケムシ類などの微小

「磯の動物」のコーナー

「干潟の動物」のコーナー

「砂浜の動物」のコーナー

な動物をモニターに拡大して展示した。これは普段では観察する機会のない微小な生物を見ることで、生命の不思議を感じ取ってもらうことや、大磯の海にもこのような動物が生息することを知ってもらうのをねらっている。また、水槽の中には、大磯のさし網や地引で水揚げされた魚やカニ・エビを飼育展示し、その生態のおもしろさや、色や形態の美しさを楽しんでもらうようにした。

今回は全体的に見て環境別の総括的な解説を行なったので、テーマを絞ってトピック的な展示も行なった。興味関心を引くようなテーマとして「相模湾の珍しい動物」や「相模と名のつく動物」を、研究課題として「虫の分布を調べよう」をコーナーとして設けた。

この展示では、海にあまり知識がなかったため、魚の種類を調べるだけでも苦労した。しかし、そのお陰で相模湾の動物に関する知見や研究課題を知ることができて有益であった。沿岸部に偏った内容になってしまったが、もう少し力を貯えて深海や植物をも含めた総合的な展示に取り組みたいと思う。

最後になりましたが、廣崎芳次博士・林公義氏をはじめ多くの方にご指導、ご助力いただいたことに厚く御礼申し上げる。

（当館　槐真史）

■主要展示物リスト

（企画展示室）

ラブカ・オキナエビスガイ・サガミバイ・ヒヌマイトトンボ・シルビアシジミ・セイタカシギ・ウミバト・ウミガラス；アサヒガニ・サガミアカザエビなど約200点。

（飼育展示）

クロダイ・スズメダイ・イトヒキアジ・ホウボウの仲間・キンチャクダイの仲間・トラギス・イセエビ・シマイシガニなど11種。

ポスターと図録
（開いているページには、シギ・チドリの絵解き検索）

「大磯海岸と照ケ崎」のコーナー

「ミニ水族館」のコーナー

【表紙写真】

エビス像（大磯町漁業協同組合蔵）

エビス（恵比寿・恵美須）は、漁村では豊漁の神として、また、一般商家では商売繁盛をもたらす神として信仰されている。写真のエビス像は、併存するダイコク（大黒）像とともに、大磯町漁業協同組合で祀られている。像は、一木造で、全体的な仕上がりはやや粗いが、量感に富み、霊威漂う逸品である。残念ながら、おそらく右手に持っていたであろう釣り竿は欠損している。制作年代は分からないが像の右下部分に『武州ちち武郡　大隅源義縄作』の陰刻がみえる。また、ダイコク像にも『大隅作』の銘が刻されている。なお、郷土資料館では、本年度に、これら2体のレプリカ（複製品）を委託作製した。折りをみて展示する予定である。

最近の受入資料

先賢の方々のご努力により、大磯町では早くから民俗資料の収集が行なわれてきた。しかし、長い間特定の収蔵施設がなく、たび重なる収蔵場所の移動で紛失や破損も目立ち、資料にとって最も大切な資料歴の記録も行方の知れないものが多い。わずかに残る収蔵台帳を頼りに追跡調査を試みてはいるが、寄贈者が故人となられていることが多く、残念ながら十分な補足はできていない。更に昭和58年には図書館が新築され、2階に郷土資料研究室ができたのを契機として新たに資料の収集を積極的に進めたところ、図書館内に設けられた収蔵庫は瞬く間に満杯状態となり、相変わらず収蔵場所の確保に奔走しなければならなかった。その後、昭和63年に郷土資料館が開館したことにより、取りあえず資料にとって最悪の状態からは脱することができた。しかし、収集資料の増加とともに、近い将来再び収蔵スペースが懸念されるであろうことは想像に難くない。不思議なもので、施設ができると収集資料は格段に増加する。館側からの働きかけがなくても資料の寄贈や情報が寄せられるようになった。それだけ資料館の存在が知れわたったことや、町民の関心の高まりを示すものと歓迎してよいだろう。

ところで、近年特に目立ってきたのが、稲荷講、庚申講、念仏講など民間信仰に関わる資料が数多く運び込まれていることである。これは、いわゆるムラ[注]や青年会、講中などの共有財産として位置付けられているもので、ご神体などが描かれた掛軸や神酒ドックリ、オズッキ、灯明皿などの法具をはじめ、椀、膳といった共同使用の食器類、また、ロウソクやマッチなどの消耗品、なかには積立金に至るまで含まれている。資料が集まることは、それ自体資料館にとってはありがたいことである。しかし、反面、それを素直に喜んでいられない事情がある。

さて、これらの寄贈資料が、信仰が希薄になってきた証しによるものかというと必ずしもそうとは言えない。例えば、船霊様（フナダマサマ）のように、ご神体を見ないという条件のもとに寄贈されたものなど依然として強い信仰心に裏付けられている場合もある。また、資料館へ寄贈した後も、祭日や命日に酒や供え物を持参されることがある。館としても要望さえあれば、あらかじめ展示しておくなど、できる限りの対応をしている。展示物の前に神酒や供物がならぶのは少々奇妙な光景であるが、これも地域とのつながりを持

受入年月	資料内容	受入方法	受入先
1989，2	稲荷講（掛軸、幟、文書ほか）	寄贈	講中（2軒）
1989，4	伊藤博文遺品（サーベル）	寄贈	青年会、西小磯東区、刀剣登録者
1989，5	念仏講（掛軸、膳、高台、文書ほか）	寄贈	講中（——）、北下町区
1989，12	庚申講（掛軸、文書ほか）	寄贈	講中（4軒）
1992，4	稲荷講（掛軸、幟、提灯、蓆、文書ほか）	寄託	講中（1軒）
1992，4	七夕（神輿、面、提灯、文書ほか）	寄託	西小磯西子ども会
1992，4	伊藤博文遺品（統監帽、山高帽、肩章）	寄託	青年会、西小磯東区
1992，4	稲荷講（掛軸、提灯、椀、幟、文書ほか）	寄託	講中（——）、西小磯東区
1992，6	庚申講（掛軸、提灯、椀、文書ほか）	寄贈	講中（4軒）

最近における共有財産の受入：（　）は資料受入時における講中参加の残存軒数

つ「生きた資料」と解釈して多少の手間は厭わない。ところが、これら資料は、個人所有のものが運び込まれることは少なく、資料のほとんどが、いわゆる共有財産であることが特徴である。個々の家にとって、その生活や生産においてムラや組、各種の講は不可欠な存在であった。家は共同体の存在なしにはありえないのである。そして、共有財産というのは、共同体を構成している家々の総意に基づき管理されるべきものであるから、共同体にとっては大きな意味を持つ大切なものといえる。その大切なものが相次いで運び込まれるのであるから楽観できない。

それでは、どのような理由で資料館へ持ち込まれるのかというと、まず第一に経済的な負担をあげることが多い。生活や生産の節目であり、人々の楽しみであった講では、講員が寄り集まり飲食を共にし、講中としての共同体意識の昂揚をみるものであった。講員は飲食物を持ち寄ったり、積み立てを行なったりしているが、当番にあたった家（宿）では決して負担は軽くない。それゆえ次第に脱退する家が増え、最終的に1軒か2軒が残ってしまう例、あるいは行事そのものを簡略化し単に道具類だけを廻していることも多くなった。しかし、本当に経済的な理由だけであろうか。昔は今よりも負担の度合いは格段に大きかったはずだ。それでも現在において「金がかかるから」とするのは生活上で占める役割の大きさが減ったためであろうと思う。生活するうえでそれほど重要でなくなった事に対して金をかけることに抵抗があるのだろう。したがって、実際は経済的負担よりも、準備にかかる人的な負担や煩わしさが直接の要因であるようだ。

第二は保管場所の問題である。共有地としての茅山や薪山などはその役割を失い、分割し私有化されたりあるいは自治体により公共施設が建てられている例もある。ムラの氏神や集会場、消防施設など必要最低限のものを除く共有空間は、どんどん切り捨てられている。このような状況下では、共有施設の新改築が設計されても、既に使われなくなった古物の置場所までは構想に入りにくい。特にガサの大きな民俗資料のたぐいは場所を失うことがほとんどである。そして、ムラの役員会などの場で資料館への持ち込みが検討されるという具合である。

このように考えると、資料を収集し保管することは資料館の大きな役割のひとつではあるが、資料館という「受け皿」があることによって、共有財産を持つ人々の間に一種の安堵感のようなものが芽生えていることも否定できない。そして、結果的に共同体意識の低下へ拍車をかけているとしたら、ともすれば受け身になりがちな資料収集のありかたをもう一度考え直してみる必要があるのかも知れない。

（当館　佐川和裕）

稲荷講参加者の変遷（大磯町中丸）：昭和5年に6軒の参加があった講中は、昭和47年には5軒、その後更に2軒が脱退し3軒が残り、平成元年には2軒だけとなった。

講中での最後の稲荷講（平成元年2月初午）

展示された稲荷の掛軸に詣でる（平成4年2月初午）

註）個々の家が、生活や生産基盤を形成するために協力し合う基本的な単位としての共同体（ムラ）で、近世の支配単位としての村や自治体としての村と区別して使用した。

西小磯の『小磯ばやし』について

渡 邊 長 吉

いつの頃、どこから誰が伝えたものか明らかでない。近郷近在の調子の早いものに比べ、極めてゆっくりで奥ゆかしい。しかも曲が多く、その上踊りがついている。一名『鎌倉囃子』といわれ、笛と締太鼓と大太鼓に鉦との4つで9種目の曲を演ずるもので、その由来をつまびらかにすることは難しい。

初めが『屋台』で、威勢のいいかけ声で『ぶっつけ』が始まると全楽器が一斉に鳴り出す。これは御輿の巡行の露払いとも云えるもので、獅見の面を付け、御幣をもって勇壮に踊る。次が『宮昇殿』。これは御輿が巡行して神社に近づき昇殿に移る知らせを意味し、荘重な調べの中に天狐の面を付け、鈴を鳴らして幻想的に踊る。そして『昇殿』となる。これは御輿が宮入りする事を寿ぐ意味の曲で、まことに優雅に舞う。終わって『神田丸』と『唐楽』である。これは御霊を迎えて鎮める意味で、複雑な曲を一気に打ちまくり、動と静の調和があって太鼓打ちの腕の見せどころである。次が『鎌倉』で、単純ではあるが神を慰める意味で、笛は特に技術が高く聴かせどころと云える。次が『仕丁舞』で、御輿を担いだ仕丁が無事御霊を宮に納めた喜びを舞い、更に全てを終えた嬉しさを体一杯にして踊る『仁羽』で、手の舞いと足の踏む処を知らぬと言った調子に、観衆も我を忘れて興じて終わる程であった。

更に『昇殿』に『憑馬昇殿』と、『鎌倉』に『國堅』と云う曲があったが、しかし今は廃曲した。

【トピックス】

◇一部展示替え

常設展示室の小コーナー「歴史を語る品々」に、昔の台所用具がお目見えしました。これは、平成4年度の博物館実習生7大学10名の手による展示です。この小コーナーは、実習生の実務実習の一環として、毎年展示替えをおこなっているもので、今回は電気炊飯器の普及してきた昭和30年代以前の台所（土間＝ニワ）の機能説明や道具を展示し、飽食の時代である現況を見なおそうとするコンセプトのもとに構成されています。狭い展示スペースでは、展示方法も展示物も限られるため、テーマを絞るのはたいへんむずかしかったようですが、とても見やすい展示になっています。また、片隅には実習中に作ったワラゾウリも展示し、自由に履いていただいて実際の感触を体験できるようになっています。特にご年配の方々は、しばし足を止めてなつかしんでいられる光景が見受けられます。なお、この展示は来年度の実習まで約1年間展示されます。

【行事案内】

みなさんの参加をお待ちしています。詳しくは町広報をご覧になるか、館へ直接お問い合わせください。

▼秋季特別展

『相模湾の動物』

10月10日(土)～11月22日(日)

相模湾に生息する海産動物を中心に、湘南海岸の移り変わりを総括的に紹介します。また、湘南なぎさプランのパネル展も同時開催しています。

▼自然観察会　（小学生以上　30名）

「巣箱をつくろう」

12月13日(日) 午前9時30分～午後3時

巣箱を作って城山公園に設置します。また、昨年の巣箱を回収し、どんな鳥が利用したかを調べます。

雨天時は20日(日)に順延。

【資料の受入】

（寄　贈）ご協力ありがとうございました。

大　磯	芦川博昭氏	ツノダル、トックリ
虫　窪	土方考策氏	ハナムスビゾウリ他
市 川 市	木村澄江氏	羽織他

（移　管）

大磯町消防本部	トビグチ他

Report －大磯町郷土資料館だより－No.6
平成4年10月31日
編集発行　大磯町郷土資料館
〒255 神奈川県中郡大磯町西小磯446-1
TEL 0463(61)4700
FAX 0463(61)4660